

## 「ヴェニスの商人」

ウィリアム・シェイクスピア(著)小田島雄志(訳)

白水社 1983年10月10日刊

今回は、シェイクスピア作品の中で最も強烈な個性の持ち主の一人であるユダヤ人金貸しシャイロックが登場する『ヴェニスの商人』を取り上げてみたい。演劇史上、シャイロックをどう演ずるかがこの戯曲の主題となってきた。17-18世紀までは喜劇として、19世紀に入り次第に悲劇として扱われるようになってきた。なぜもともと喜劇として書かれた戯曲が悲劇として演じられるようになったのだろうか。

この作品を理解するためには、その歴史的背景を理解しておくことが重要である。ギリシャ時代の哲学者アリストテレスは『政治学』の中で「憎んでも最も当然なのは高利貸しである」と論じ、利子をとることを倫理的に拒否していた。その伝統が中世の神学者トマス・アクィナスに引き継がれ、キリスト教徒は利子を取ることを禁じられた。その空白を埋める形で金融業を営んだのがユダヤ人である。しかし、彼らは自由な職業選択の中から金融業を選んだのではなく、土地所有は認められず、住居もゲットーという居住地域に閉じこめられるという制約下で許された生業である、金融、宝石商、学問、芸術に特化することで生き残ってきたのである。

この作品のもう一人の主演である貿易商アントーニオはキリスト教徒でありヴェニス市民共同体の一員であるが、共同体の中では金利は取らないと公言する。それは取りも直さず、ユダヤ人は共同体の外にいて、金を貸して利子を取る以外に所得を得る手段を持たないことを意味している。だからこそ、アントーニオの台詞「金を貸してくれるなら、友人に貸すと思うな、(中略)それよりもその金をおまへの敵に貸すと思うがいい、そうすれば万一契約を破られたとき、大きな顔で違約金をとれるだろう」がこの戯曲の根本的な設定となっているのである。

ここで我々は金貸業というのは、社会のアウトサイダーとして機能し、「金に金を産ませる」ことをはばからない生業であるということを理解すべきである。シャイロックが金を貸す場面、返済ができずに法廷で争われる場面の台詞は、金融業とは何なのかを考える上での絶好の題材である。当初はシャイロックに対する蔑みや批判は喜劇として観客に喝采をもって受け入れられたが、資本主義が定着する19世紀以後になると、ユダヤ人に対するこの差別と蔑視は悲劇と捉えられるように変貌してきたのである。

消費者金融やグレーゾーン金利の引き下げなど何かと金貸業が話題になる折、もう一度原点に立ち戻ってこの生業の意味を考えてみるべきであろう。